

特性論と類型論の統合に関する基礎的研究

Basic research on integration of a trait-theory and a typology

萩生田 伸子（教育学部・准教授）

Nobuko Hagiuda (Department of education Associate professor)

1. 目的

先におこなった調査（平成 15, 16, 17 年度科学研究費『性格検査尺度の特異項目機能に対する頑健性の研究』）において、特性論的立場をとる5因子性格特性(Big Five)論^{*1}に基づいて選出された項目の性質に関して国際比較を含めた種々の検討をおこなった(図1を参照)。

その一環として複数の回答者群の比較をおこなった際に、回答者の中にE(外向性)因子とO(経験への開放性)因子が高い相関を示す群と、そうではない群が存在することが明らかとなった。

これは言い換えると、潜在的に『E(外向性)とO(経験への開放性)を区別しない』回答者と、それらを『別個のものとして認識する』回答者、つまり『質が異なる回答者』が混在しており、その混在比率の高低によって結果の相違が現れたと考えられる。

そこで本研究では、5因子性格特性項目に対する回答、および、時間のゆとりや生活満足度、科学の進歩に関する態度等の、世論調査で使用されている項目群に対する回答を用いて、『質が異なる回答者』の分離・検出について検討をおこなった（この『質が異なる回答者』の検出が、パーソナリティの類型の検出に繋がると考えられる）。

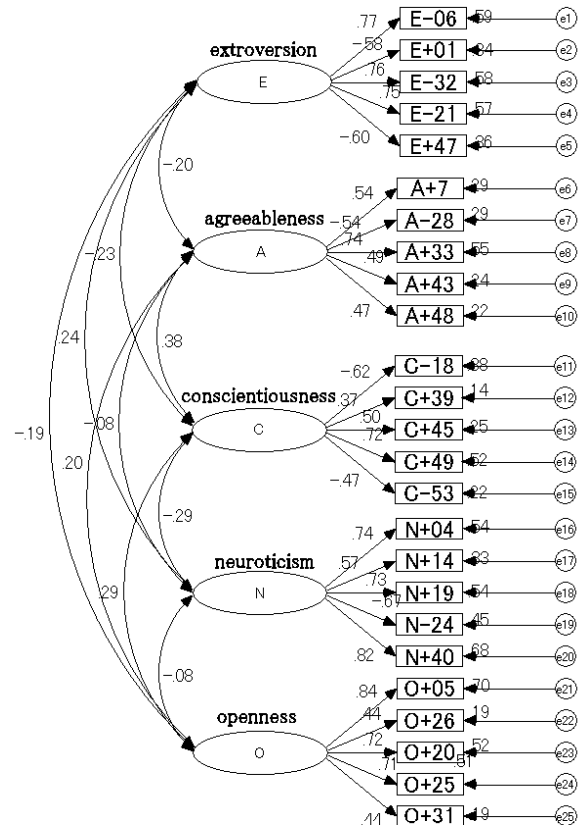


図 1 5 因子モデルの適用例

先の研究でおこなった因子分析および多母集団の同時解析の結果から、A因子とC因子を明確に区別する回答者群と区別する回答者群が見られることが予想される。また、E(外向性)とO(経験への開放性)の識別についても同様の予想がなされる。

2. 方法

日本の大学生 3 群（関東地方の大学での質問紙調査群 663 人、関東地方の大学で

^{*1} 5 因子性格特性論とは、パーソナリティを記述する際の基本次元として五つの因子(E,N,O,A,C)を用いる立場である。また、この 5 つの基本次元は比較的安定して通言語・通文化的に観測されることが知られている。

Web 調査群 467 人，調査会社に大学生としてモニター登録した人に Web 調査群 374 人)に対しておこなった JBIF と生活満足度等に関する調査データを用いた．なお若干の欠損値が存在したために EM アルゴリズムを用いて補完した．

3. 結果と考察

まず，図1のような単純構造を強調した因子分析モデルを想定して，改めて多母集団の同時解析をおこなった．各群のパラメータを推定するにあたり，配置不変(同値条件なし)モデルから測定不変(因子負荷量，因子間相関等に同値制約を置いた)モデルまでを順次適用し，パラメータ間の差に対する検定統計量を算出した．

どのパラメータに同値制約を置くかによって結果は異なるが，たとえば，因子間相関の推定もおこなうモデル二種類ではともに，『大学生としてモニター登録した回答者群』のE因子－O因子間相関は5%水準で有意であった．すなわち『大学での Web 調査群』と比較して強い相関(ex. 社交的で話し好きな人は好奇心が強くて知的に洗練されていると捉えがちな傾向)が見られた．逆にN因子－C因子間では『大学での Web 調査群』でより高い相関が見られた．

従来より『A(協調性)因子とC(良心性)因子をあまり区別しない(ex. 同調的，協力的な人は誠実，計画的，良心的と捉える等)』のは日本文化に特徴的とされてきた(他の言語圏で5因子性格特性に関する調査をおこなった際には，A因子とC因子の混乱は比較的少ない)．今回も因子間相関を見る限り，正の相関がみられたが，E因子－O因子間と比較して特に高い相関が存在するとは言えなかった．これは今回用いたデータが大学生のもののみであることと関係していると考えられる．すな

わち，E(外向性)とO(経験への開放性)については，若者層では全体的に区別しない傾向が強まっており，その点がE因子－O因子間の相対的な相関の高さとして現れたと考えられる．

なお，群間の相違としては同値制約を置かない場合，『大学での質問紙調査群』と比較して『大学での Web 調査群』のA因子－C因子間の相関は5%水準で有意に高かった．これらの二群は『大学生としてモニター登録した回答者群』よりも諸属性の類似度が相互に高いと考えられるにもかかわらず差異が存在したことになる．調査手法の相違の影響がでたとは考えにくく，理由は今のところ不明である．

その他，世論調査で使用されている項目群と5因子性格特性の関係について潜在クラス分析を用いて検討をおこなったところ，5因子性格特性のうち『N(神経症傾向)因子の得点が高い回答者群』は『生活満足度が低い群』に属する確率が高い等，いくつかの知見が得られた．これらに関しては，より非侵襲的な項目による不適応者検出という応用の可能性も考えられるが，回答者群を分類し類型を探るという点では不十分であり，別の手法を検討する必要がある．

また，今回を含めた最近数回の調査において大学生が理解可能な人間の特徴や様子を表現する語彙の変化が観察されている．たとえば『はにかむ』や『閉口する』といった言葉の意味が通じない学生が出現している．したがって継続的にJBIF I等を用いた調査をおこない，語彙の変化および5因子モデル自体が妥当であるかについての検証をおこなう必要もあると考えられる．